

香川県立文書館 収蔵文書目録第12集

讃岐国高松松平家中

小夫家文書目録
小夫孝之助家文書目録

平成21年 3月

香川県立文書館

讃岐国高松松平家中小夫家文書目録 解題

1. 小夫家文書の伝来と整理の方針

本目録に収載した小夫（おぶ）家文書は、讃岐国香川郡高松（現香川県高松市）小夫孝重家の原蔵にかかり、平成18年度に当館が器物を含め一括して寄贈を受けた128点の全てである。

本文書群は、当館に受け入れたことで、仮整理のうえ、文書群番号544と通し番号を付与し、マイクロフィルムによる閲覧に供してきたものである。このたびも点数が少ないこともあり文書の分類はおこなわず、当初の通し番号のままで目録を作成した。

なお末尾7点は文書ではないものの文書と一括で伝来したものであるため収載した。

2. 小夫家の来歴と文書群の概要

まず、小夫家の略系図を「小夫氏系譜并覚書」、「一類書」、「小夫家家系調査」等に拠り解題末尾に掲出した。

小夫家は禄高300石を給された旧高松藩の上士で、三家ある小夫家の内の本家、藩の記録等では小夫五郎四郎家と称された家である。その屋敷は高松城の外堀を常盤橋から渡った内町の正面、見附の北に南面してあり、この位置は元禄元年に拝領以来、明治初年まで変らなかった。

小夫家の祖は大和国の官符衆徒といわれる旧族で、城上郡小夫邑（現奈良県桜井市小夫）を領し、同所の小笠原山に城を築き盤居していたようである。

家伝では三代実録の貞観九年の叙目に見える豊前守藤原仲直を祖とし、後醍醐天皇の頃、南朝方の官軍として仕えた井戸佐渡権守の末孫、上総介実祐が小夫村を領して小夫氏と称したとあるが、鎌倉末期より、当地の来迎寺檀家としてその名が見えるので、古くからの在地の豪族であったと思われる。

官符衆徒は興福寺の僧官であり、かつ室町幕府直参と見なされる家であるが、動乱の続いた中世の大和国にあって小夫氏の動向は幾つかの記録にその名を見ることができる。

永禄8年10月には松永久秀方の軍勢に攻められた小夫氏は小夫郷を焼き籠城したが、15日には扱いにより開城している。其の後も松永氏との抗争は続いているが、やがて松永氏が没落し筒井順慶が大和を統一支配すると小夫氏もその傘下に入ったようである。

天正10年6月本能寺の変が起きた頃、小夫正之は妻の父井戸若狭守良弘が城主となっていた宇治の槇島城にあったが、良弘の二男治秀の妻が明智光秀の姪であったことなどから、井戸氏の去就には難しいものがあり、井戸氏の一族は山崎合戦の後には槇島城を出て吉野へ隠れたという。

小夫氏の家伝ではこの時、筒井順慶の扱いにより和談が調い、開城し大和国へ帰る途中、善堤山（現奈良市善堤山）に於て秀吉方の軍と遭遇し、一族、家臣の大半が討取られ、正之一人小夫村へ帰陣して籠居した。

その後、秀吉の弟秀長が大和領主の時その家臣となり、秀長の死後は養子秀俊に仕えていたが、文禄4年、関白秀次逆心の時、その徒党とみなされ、三河国吉田城主池田輝政に預けられた。慶長5年、輝政が播磨国へ所替えになると正之も従い行き、同国宍粟郡に所領を与えられて居住した。

正之の妹に、後に尼となり福蔵主と呼ばれる者がいた。天正14年、秀吉の妹が徳川家康に嫁ぐ際、浜松に従い、その死後も家康の侍女となっていたが、その後、家康の五男、武田萬千代信吉に附属され、信吉死後は頼宣、頼房の生母である養珠院殿於萬方の館に在って50石を宛行われていた。その縁であろう、正之の嫡子浅右衛門は尾張徳川家に、次男傳兵衛は紀州徳川家に、三男理右衛門正象は水戸徳川家に仕えている。

水戸家に仕えた正象は頼房の長子頼重の下館入部に際し、その附属となり、更に高松拝領に従って讃岐へ移ってきたものである。

高松藩での小夫家の役職は、書院番、小性、使番、側用人、鍵奉行、留守居番頭等に任じられ、各代とも藩主に重用されたようである。

また、明暦2年には正象の次男正守が、享保元年には忠知の次男忠譽が召出されて分家し、それぞれ小夫隼太家、小夫茂作家と称され藩の要職に就いている。

小夫家は昭和20年7月4日の米国軍による高松市爆撃により家屋を全焼されたため、系譜を始め伝来の品々の殆どを失われたとのことであるが、ここにみる文書と拝領品等は、かろうじて焼失を免がれたものという。詳しいことの伝わっていない大和国の官符衆徒の一族のその後の経過など、伝承としても興味深いものがあるし、高松藩士となってからも上級藩士としての文書、中でも役向関係の小絵図がまとまっており、これらは藩主側近の勤務の実態が把握できる基本史料であることと、このような文書は藩主松平家の文書にも見い出せない点でも貴重である。

先述のとおり、高松市は市街地の大部分が米国軍の爆撃を受けたため、藩政文書を始め旧藩士家の文書は殆ど残っておらず藩政史の研究に苦慮しているところであるが、この小夫家文書は点数こそ多くはないものの非常に上質の文書であり、今後の活用が期待される場所である。

なお、この家伝の文書、器物の保存に心を砕かれ、当館への寄贈を決断された小夫孝重氏の夫人、和子女史が、この目録の刊行を見られることなく昨年逝去されたことは残念でならない。ここに謹んで御冥福を御祈りいたしたい。

<参考文献>

「奈良県史」第11巻（同編集委員会編集、朝倉弘著、株式会社名著出版、平成5年）

官符衆徒小夫氏の事跡について多大な御教示を賜りました。厚くお礼を申し上げます。

〔付記〕

本目録の整理、解題は正木英生が担当し、目録原稿のコンピュータ打ち込みは鈴木雄大がおこなった。

小夫家略系図

◎藤原仲直 内蔵允 豊前介 豊前守
 西三條右大臣藤原良相公大和国官符職の時、官使となり大和国に住み国務を司る。子孫国内所々に散在し八十余家と分かれ、各々領主となる。人崇んで官符家と云う

苗裔
 實藤 井戸佐渡権守
 後醍醐天皇に仕えて軍忠あり

藤辰 井戸筑後守 實空入道
 藤時 井戸筑後守 体意入道

藤正 井戸小左衛門尉
 實祐 小夫上総介
 大和国城上郡小夫邑小笠原山に城を築き居城とし小夫氏と称す。文龜2年12月3日、山辺郡来迎寺に陣中法度の壁書を掲ぐ。永禄5年5月7日80余歳にて興福寺に入り得度

<p>祐忠 小夫十郎 兵庫介 天正2年10月5日 松永久秀の軍と戦い討死 室 山田民部大輔重宗女</p>	<p>正之 小夫主馬佑 宗林 天正10年6月 本能寺の変に際し井戸若狭守良弘と宇治槇島城に籠もる。和睦開城後、大和国へ帰る途中、羽柴方の軍と遭遇し小夫氏の軍の殆どが討ち取られ正之一人小夫村へ帰り籠居す。後豊臣秀長、秀俊に仕え、関白秀次の事件により池田輝政に預けらる。慶長15年正月19日播磨国宍粟郡にて歿 室 井戸若狭守良弘女</p>
<p>實憲 陽専坊 興福寺南蔵院弟子</p>	<p>女子 福蔵主 豊臣秀吉の妹、朝日姫に仕う。その徳川家康に嫁ぐに従い朝日姫死去後も徳川家に残り家康の侍女として仕え、後武田萬千代信吉に附属。萬千代歿後は家康の側近に戻り、家康歿後は養珠院於萬方附となる。寛永18年7月24日歿</p>
<p>女子 眼病のため山辺郡三ヶ谷村の分地を領し松岡内蔵允永矩を養子とす</p>	<p>女子 山田民部少輔室</p>
<p>忠一 加流村の分地を領す。 慶長軍役 河州片山辺にて討死</p>	

女子 挟川新之丞室

某 小夫介右衛門 小傳次
慶長19年大坂城に籠もり生死不明

香祐 玄觀房
南都正智院住職

某 小夫浅右衛門
尾張徳川義直卿に仕う。慶長11、12年頃歿、子孫無

正弘 小夫傳兵衛 又、正供
紀州徳川頼宣卿に仕う。故有て退去後江州日野に住み、三ヶ谷長右衛門と称す

初代
◎正象 小夫理右衛門
水戸徳川頼房卿に仕え、禄150石を賜う。松平頼重の下館拝領に従い50石加増。更に高松移封により100石加増され都合300石を給され御書院番頭となる。寛文7年11月29日歿、61歳

室 水戸家臣 永田九平次 女

二代

正久 小夫五郎四郎
慶安4年父正象の致仕にともないその禄300石を賜い御書院番となる。後、側小性、通辞、歩行頭を歴任。寛文6年5月28日病により致任。同8年正月6日歿、33歳

室 山田道鑑女

正守 小夫十郎兵衛
明暦2年10月29日召出され小性組となり、萬治2年正月17日兄正久勤仕の賞として禄200石を給され分家。延宝3年頼重附となり出家。法名正守と称す。元禄12年12月25日歿、61歳、小夫隼太家の祖

室 なし

正勝 小夫官兵衛
始 深沢藤次右衛門養子。後離別 兄正久の家を嗣ぐ

女子 松井三之丞前保室

三代 正勝 小夫官兵衛
実は正象三男、明暦2年深沢藤次右衛門の養子となり頼重に見ゆ。翌年深沢氏を去り帰家。寛文6年正久疾病のためその嗣となり禄200石を賜い小性組となる。後御書院番に転ず。延宝3年4月10日江戸に於いて歿、30歳

室 戸祭五郎左衛門勝之女

四代 忠知 小夫半左衛門 五郎四郎 茂作
延宝3年9月朔日 三歳にて家督相続、禄200石を賜う。頼常、頼豊に仕え、小性、使番、横目、用人、奉行、馬廻頭を歴任。正徳2年12月18日禄50石加増、享保元年12月5日禄50石加増 都合300石となり祖父の禄に復す。同17年閏5月4日病疾により致仕。同19年5月15日歿、62歳

室 渡辺大膳武女 弁又豊

五代

正長 小夫左門 五郎四郎 又正辰
享保17年5月11日家督相続。禄300石を賜う。次小性、鎗奉行、留守居番頭を歴任し、宝暦6年閏11月11日致仕。安永3年正月21日歿、76歳

室 西園寺家諸大夫 濱崎日向守女 悦

忠譽 小夫庄七 茂作
享保元年12月18日召出され公子門三郎附小性となり、門三郎早世により次小性となる。世子頼治附をへて近習、小性の上格に任じ、元文3年11月6日禄100俵を賜う。その後側用人、用人となり役料100俵を加えらる。寄合番頭、奉行所奉事、寺社奉行を歴任し、寛延2年2月29日歿、54歳

小夫茂作家の祖

時昭 小夫善之助
正徳4年9月13日召出され公子門三郎附となる。享保元年11月2日歿、14歳

女子 栄

某 春之介

女子 親
高畑左傳次正峯室

女子 加奈
忠譽養女となる

六代

正武 小夫小膳 数馬 五郎四郎

宝暦6年閏11月17日家督相続。禄300石を賜う。次小性、使番、先手頭、中寄合、大寄合、鎗奉行、旗奉行、留守居番頭を歴任。享和3年閏正月18日致仕。同年6月24日歿、63歳

室 中條傳八女 紋

某 愛蔵

七代

正盈 小夫十郎
享和3年閏正月18日家督相続。禄300石を賜る。次小性、使番、先手頭、中寄合、大寄合。鎗奉行を歴任。天保元年3月15日歿

室 田中小角妹

女子 堀蔵人 後室

八代

正則 小夫数太 理右衛門

天保元年4月7日家督相続。禄300石を賜る。書院番組、次小性、徒頭を歴任。同14年正月3日歿

室 鶴殿九郎兵衛妹

後室 木村亘女

正温 小夫茂吉
兄正則養子

某 井戸五郎
井戸小左衛門養子

九代

正温 小夫茂吉 五郎四郎
実は正則弟。天保14年2月16日正則養子となり同月26日家督相続、禄300石を賜る。書院番組、進物役、小性を歴任し安政4年10月2日歿

十代

正照 小夫半蔵 斎宮 静

実は正則男。弘化2年2月16日正温養子となる。安政4年12月19日家督相続。禄300石を賜る。書院番組、進物役、書院番組頭、使番を歴任。明治元年11月12日中士等と改められ、同2年12月

